

# 甲野 勇

くにたちに来た考古学者

誕生  
120年



1



2



3



4



5



6

# はじめに

甲野勇は、1946（昭和 21）年から 1967（昭和 42）年に亡くなるまでの、およそ 20 年間で国立に暮らした考古学者です。1922（大正 11）年に東京帝国大学理学部人類学科選科へ進学した甲野は、この頃から縄文土器の科学的な編年研究に取り組み、同窓である山内清男や八幡一郎とともに「編年学派の三羽鳥」と呼ばれ、日本の考古学史に名を残しました。戦後は多摩地域の歴史や民俗に関心を移し、在野の研究者とともに地域史研究を展開し、博物館の設立や発掘調査の指導、文化財保護に関する啓蒙活動を積極的に行っています。

くにたち郷土文化館では、1994（平成 6）年の開館以来、「甲野勇氏資料」を所蔵しており、現在これらの資料のデジタル化を進めています。本展では、甲野の生誕 120 年を記念し、デジタル化作業における調査で判明した内容とともに、甲野が指導した発掘調査や博物館活動を中心に、多摩地域における甲野の功績を紹介いたします。



イラスト 甲野勇

## 甲野 勇 略年譜 くにたちに来るまで

1901（明治 34）年 7 月 30 日 東京市日本橋区薬研堀に生まれる

甲野は、旧東京大学の教授や宮内省侍医を務めた眼科医の父 斐<sup>たすく</sup>（1855-1932）と、儒学者乙骨耐軒（1806-1859）の孫である母 タキの四男として生まれました。斐は甲野眼科医院を開業しており、甲野は病室や手術室、薬草園が併設された自宅で、兄弟姉妹に囲まれながら育ちました。

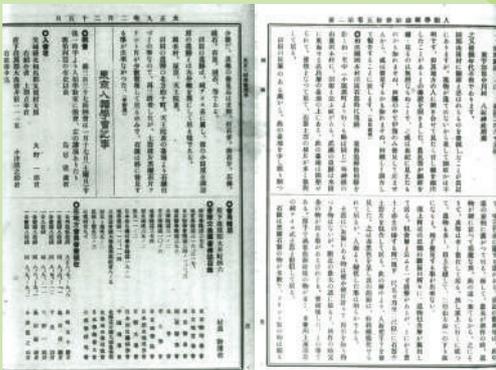


斐とタキ  
ともに甲野家所蔵

1908（明治 41）年 東京府豊島師範学校附属小学校に入学

1913（大正 2）年 明治中学校に入学

1920（大正 9）年 自身初の報告書  
「相模国岡本村沼田石器時代遺跡」  
が『人類学雑誌』に掲載される



「相模国岡本村沼田石器時代遺跡」  
『人類学雑誌』第 35 巻第 2 号（1920・大正 9 年）所収  
国立国会図書館蔵



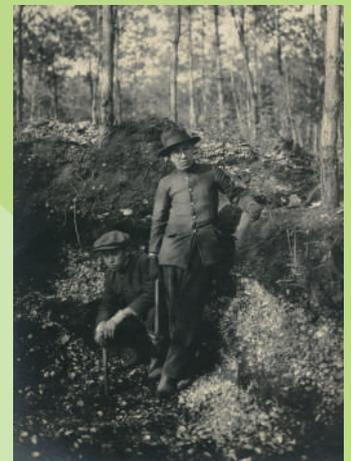
甲野家の兄弟姉妹 明治末期  
左から長女 文子、勇、長男 謙三、次女 恭子、三男 繁夫  
甲野家所蔵

1922（大正 11）年 東京帝国大学理学部人類学科選科に入学

松村瞭、鳥居龍蔵、長谷部言人、小金井良精らに師事し、同窓生には山内清男、八幡一郎、中谷治宇二郎、宮坂光次らがいました。



鳥居龍蔵を囲んで  
1922～1924（大正 11～13）年頃  
前列左から鳥居龍蔵、鳥居龍雄、後列右から  
八幡一郎、一人おいて宮坂光次、甲野



人類学教室による加曾利貝塚の調査  
1924（大正 13）年 3 月 30 日  
左から八幡一郎、甲野



人類学教室時代のスナップ  
1924～1925（大正 13～14）年頃  
左から中谷治宇二郎、甲野、宮坂光次

## 考古学との出会い



中学生時代の甲野  
『甲野勇先生の歩み』所収

甲野は、幼い頃に同居していた大叔父 遠藤信古の部屋で黒曜石の槍や鏃を発見し、大昔の人々の生活に関心を抱くようになります。中学校に通う頃には、学校へ行くふりをして家を出ては、1 人であちこちを発掘してまわるような少年でした。また、遠藤は甲野家に併設された薬草園の造り手でもあり、道端や庭の隅に生える草の一つ一つに名前が付けられている事を甲野に教えます。考古学の道に進み、武蔵野の自然を愛した甲野にとって遠藤は、重要な存在でした。

# 甲野勇氏資料とは

甲野家に保管されていた甲野勇に関する資料群で、1993（平成 5）年に国立市へと預けられた後、1997（平成 9）年に正式に寄贈されています。1999（平成 11）年 4 月には国立市の有形文化財に登録されました。資料の多くは甲野が生前に使用していたものですが、甲野の逝去後に刊行された記念誌や選集なども含まれており、共に一連の資料群として甲野家で大切に保管されてきたことがうかがえます。

資料群は書籍や雑誌をはじめ、出土遺物や発掘調査の様子をとらえた写真類、自筆の原稿類、出土遺物の実測図や拓本、書簡などから構成されており、その数はおよそ 8,600 件に上ります。考古学、民族学、民俗学、地域史、植物学、博物館活動など、様々な分野で活躍した甲野らしく、多岐にわたる資料が収められています。



荻窪時代の甲野家 勇と綾子と 3 人の娘たち  
1935（昭和 10）年頃  
甲野家所蔵



真福寺貝塚 泥炭層の調査  
1926（大正 15）年 11 月

## 甲野と雑誌編集

甲野は、1932（昭和 7）年創刊の雑誌『ドルメン』の編集を手伝うようになります。『ドルメン』は、学者たちが気ままに遠慮なく語り合うための「囲炉裏ばた」のような役割を担った雑誌でしたが、1935（昭和 10）年に廃刊してしまいます（その後再刊）。廃刊を惜しんだ甲野は「似たものをやってもいいですか」と直談判し、自ら立ち上げた翰林書房から、1936（昭和 11）年に雑誌『ミネルヴァ』を発行しました。その後も甲野は、山岡書店発行の『民族文化』（1940・昭和 15 年創刊）や『あんとろぼす』（1946・昭和 21 年創刊）の編集に携わります。いずれも短命に終わりはしましたが、様々な論考を世に送り出しました。



『ミネルヴァ』創刊号  
個人蔵



『民族文化』第 1 巻第 3 号



『あんとろぼす』創刊号

1925（大正 14）年 東京帝国大学理学部人類学教室の副手となる

1926（大正 15）年 甲野綾子と結婚、荻窪に居を構える

従姉である綾子と結ばれ、後に男児 2 人、女児 4 人に恵まれました。

同年 大山柏の史前研究室（大山史前学研究所）の所員となる

甲野は研究所の所員とともに、関東の貝塚を調査し、その結果は 1935（昭和 10）年 5 月に発表された「関東地方に於ける縄紋式石器時代文化の変遷」（『史前学雑誌』第 7 巻第 3 号）にまとめられました。

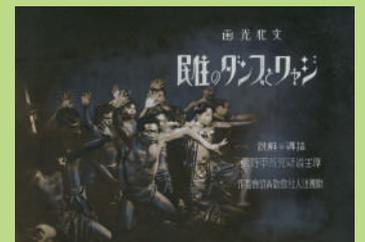


大山の研究室にて 1926（大正 15）年頃  
左から大山柏、甲野、1 人おいて宮坂光次

1939（昭和 14）年 東京帝国大学理学部の嘱託となる

1943（昭和 18）年 厚生省研究所人口民族部の嘱託となる

東南アジア民族の研究に従事し、『南方民族図譜』（1943・昭和 18 年）や、文化映画『ジャワとスンダの住民』を制作しました。



文化映画『ジャワとスンダの住民』表題  
1943（昭和 18）年頃



東京帝国大学の嘱託委嘱状  
1939（昭和 14）年 4 月 19 日

1946（昭和 21）年秋 国立に転居する

# 1. 博物館をつくる

山野草を愛した甲野が、栄ゆく都心を離れ、空襲で「火傷だらけ」になった荻窪も後にして、国立へと引っ越して来たのは、戦後まもない1946（昭和21）年のことでした。敗戦により、それまでの皇国史観に基づいた歴史教育も見直されることとなり、当時の青少年は信じてきた“歴史”を失いました。科学による正しい古代史を編成して「心のよりべ」を与えることが自身の使命であると考えた甲野は、この頃から青少年への教育活動を開始します。遠い祖先の歴史を実物資料で裏付けることのできる博物館の設置は、甲野が使命として果たしたもののひとつでした。



『古代史と博物館』原稿 1946年

『あんとろぼす』創刊号に掲載された甲野の論考。「遠祖の文化遺産を直接の基礎として編纂」する博物館が、教育において大きな役割を担うと述べています。これは戦前の社会教育への抗議であり、甲野自身の行動宣言でもありました。

## 武蔵野博物館

甲野が最初に手掛けた博物館は、1948（昭和23）年10月に井之頭自然文化園内に開館した武蔵野博物館です。甲野の発掘仲間であった塩野半十郎が、その半生をかけて収集した考古資料（以下「塩野コレクション」）の展示公開を企図したことが発端でした。甲野は、かつて東京帝室博物館の監査官を務めていた後藤守一に相談を持ち込み、3人は博物館の候補地を探しまわります。建設地は、位置の問題でなかなか決まらなかったが、府中町、武蔵野市、多摩村などから誘致の声が上がり、特に府中町は、当時の新聞で「猛烈な運動をおこし」ていると報じられています。最終的には、武蔵野市の井之頭自然文化園内にあった講堂を改修して博物館とすることが決定しました。

塩野コレクションの公開という目的に加え、首都における郷土博物

館として計画された武蔵野博物館は、都営とすることが望まれましたが、戦後の財政難のために実現せず、1948年7月に設立された学術文化団体「武蔵野文化協会」が、博物館の運営を担うこととなりました。

武蔵野博物館の展示で特に注目されるのが、当時はまだ珍しかった野外展示です。「祖先の村」と名付けられ、縄文時代の竪穴住居や弥生時代の高倉、敷石住居が復元されました。屋内展示も甲野の方針により、写真や模型が用いられ、平易な解説が添えられました。石器や骨角器には柄が付けられ、編年の標準となるような関東地方の貝塚の分布を示した大型模型も設置されました。縄文土器の編年研究で名を残した甲野の研究成果が遺憾なく発揮された展示であり、考古資料を実際の生活用具として捉えた甲野の視点がうかがえるものでした。



開館当時の武蔵野博物館  
1948年10月20日  
江戸東京たてもの園所蔵  
右端後姿が甲野



武蔵野博物館 展示室 1950（昭和25）年頃



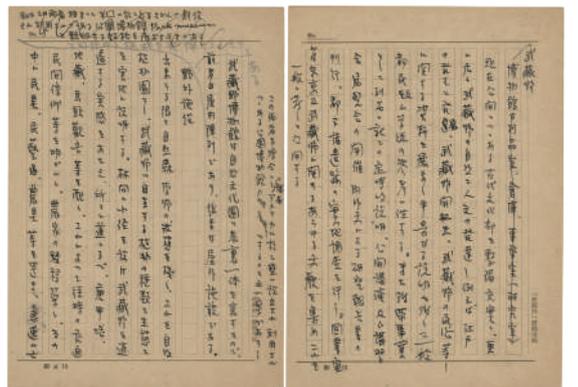
武蔵野博物館建設趣意書 1948年



縄文時代の竪穴住居  
1948～1953（昭和23～28）年頃



家形埴輪の復元住居  
1948～1953年頃



武蔵野博物館拡張に関する草稿  
1948～1953年頃

## 武蔵野郷土館

民間団体である武蔵野文化協会の財源による武蔵野博物館の運営は非常に厳しいものでした。博物館の規模も不十分で、当初予定されていた総合的な展示も実現できないため、協会は都営促進のための請願書を東京都に提出しますが、なかなか実現には至りませんでした。しかし、同館の都営化は全く別の方向から動き出した計画によって実現することになります。

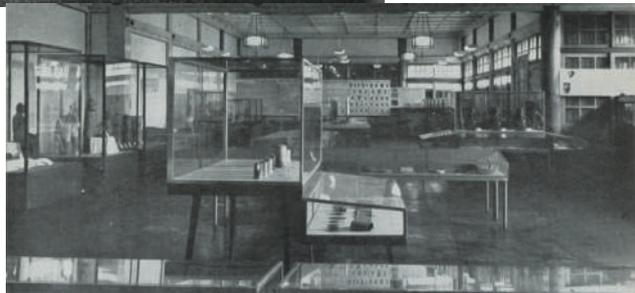
小金井公園の前身である小金井緑地は、1940（昭和15）年の紀元二千六百年記念事業として造成された大緑地の一つでした。1951（昭和26）年にこの土地が東京都に返還されると、都は社会教育施設を伴うレクリエーション施設として「武蔵野郷土館（仮称）」を設けることとし、公園としての整備が進められました。武蔵野郷土館には武蔵野博物館の機能をそのまま移設することが決定し、1953（昭和28）年に同館は東京都へ移管されました。

武蔵野郷土館は、小金井公園とともに1954（昭和29）年1月に一般公開されました。館内には武蔵野の歴史を物語る資料が並び、「玉川上水展」「民俗展」など多彩なテーマによる企画展も開催されました。

郷土館の目玉は、武蔵野博物館の野外展示「祖先の村」を継承し発展させた「古代の村」で、弥生式高床倉庫と古墳の石室、縄文時代の敷石住居が設置されました。同館学芸員であった吉田格によると、「古代の村」は甲野の発案でつくられ、解説もすべて甲野によって書かれたといえます。また、小中学生を対象とした実験的な学習会



武蔵野郷土館（旧光華殿）と陳列室（考古資料）  
『武蔵野郷土館案内』（1964・昭和39年7月）所収



や、教師や一般向けの講習会も開催され、武蔵野の歴史と文化の普及に貢献しました。小中学生の団体は、事前に手続きをすれば観覧無料であったため、多くの学校が社会教育の場として武蔵野郷土館を利用しました。

武蔵野郷土館は1991（平成3）年に閉館し、1993（平成5）年、同地に江戸東京たてもの園が開館しました。



弥生式高床倉庫 1954年頃  
左から吉田格、甲野、関根福司、1人おいて田尻清子



古墳時代の竪穴住居 1954年頃



三笠宮崇仁親王からの書簡  
1956（昭和31）年3月3日



三笠宮崇仁親王に展示解説をする甲野（左）  
1954年4月3日

## 国分寺町立文化財保存館

戦後の過酷な状況下で、甲野の心を楽ませたのは「緑の田園を散歩すること」でした。国分寺や府中を歩き、土師器や須恵器の破片が散乱しているのを見つけた甲野は、武蔵国分寺住職の星野亮勝や高校生らとともに、多喜窪遺跡や武蔵国分寺周辺の竪穴住居跡の調査を行っています。

国分寺町立文化財保存館は、武蔵国分寺跡やその周辺の遺跡から出土した遺物を、貴重な郷土資料として長く保管するために、1952（昭和27）年12月、武蔵国分寺の境内に開館しました。甲野が同館の設立に具体的にどのように携わったのかが分かる資料は見

つかっていませんが、周辺の遺跡の調査などによって貢献したとみられます。甲野が記した「国分寺歴史博物館の設立」（『武蔵野 第32巻』第3・4号）には、「小規模なものではあるが、往年の生活をしのぶ遺跡の上に造られる所に大きな意味がある」と、同館に寄せる期待が表れています。

文化財保存館は、武蔵国分寺跡資料館の開館に伴い、2009（平成21）年に閉館しました。



文化財保存館外観 1952年頃



国分寺境内の万葉植物園



国分寺周辺から出土した縄文時代の遺物



文化財保存館を訪れた三笠宮崇仁親王に  
解説をする甲野（手前）  
1954（昭和29）年

## コラム 旧石器時代の発見

群馬県みどり市に位置する岩宿遺跡は、1946(昭和 21)年に関東ローム層から石器が発見され、縄文時代よりも前の日本には人類は存在しないという、それまでの定説を覆した遺跡です。

1945(昭和 20)年、武蔵国分寺の住職 星野亮勝は、国分寺市恋ヶ窪のローム層から黒曜石の剥片を採集しました。星野はこの事を甲野に相談し、後日調査を行う約束が交わされますが、その機会が訪れないうちに岩宿遺跡の発表となり、甲野は後悔したといいます。剥片が発見された現在の熊ノ郷遺跡は、調査が早ければ日本初の旧石器時代発見の地として教科書に載っていたのかもしれませんが。



武蔵国分寺跡にて  
右から3人目が甲野

## 私達の歴史館

私達の歴史館は、西武園(現 西武園ゆうえんち)内に設けられた展示施設で、甲野が展示指導にあたりました。展示は「ジオラマの部」と「実物資料陳列」の2部構成になっており、旧石器時代から江戸時代に至るまでの人々の生活の様子が、34基のジオラマで再現されていました。

現在のところ、歴史館が存在していた時期は良く分かっていませんが、当時の新聞広告によると、1959(昭和 34)年3月頃から5月までと非常に短かったようです。しかし、甲野が残したメモには、歴史館の展示の拡充と、植物園の併設が提案されており、施設の改善に努めていた様子がうかがえます。

甲野がなぜ西武園内の展示施設を手掛けたのか、現在のところ、それが分かる資料は見つかっていません。ただ、甲野は、1959年に連載された朝日新聞の記事「空から見た三多摩の遺跡」や、1960(昭和 35)年刊行の著書『武蔵野を掘る』で、朝日新聞社とともに仕事をしています。朝日新聞社は、私達の歴史館が開館する前に、西武園内での展示を主催しており、その繋がりから甲野から展示指導をするようになったのかもしれませんが。



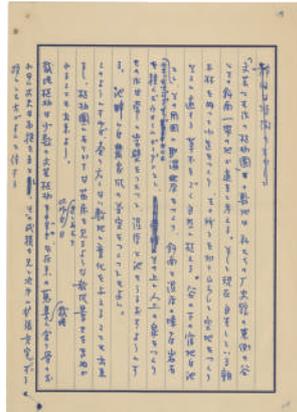
西武沿線案内シリーズ No.9 西武園 私達の歴史館  
1959年頃 西武電車発行



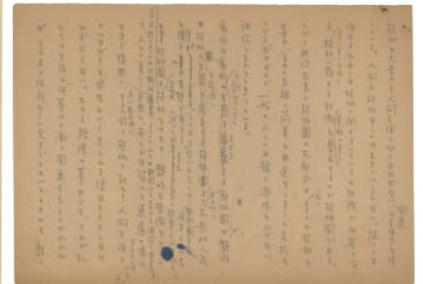
歴史館外観



ジオラマ展示



「芸術と生活の植物園」構想メモ 昭和30年代



## 多摩郷土館

武蔵野博物館や武蔵野郷土館で展示公開された塩野コレクションでしたが、その一部は1952(昭和 27)年頃から、多西村(現 あきる野市)の多西中学校の校舎に保管されていました。しかし、同校は1957(昭和 32)年に廃校となり、資料を保管していた部屋も荒れ放題となります。加えて校舎も処分されることとなり、塩野コレクションは立退きを迫られました。行き場のなくなった貴重な考古資料を活

用しようと甲野は再び塩野と協力し、資料公開の道を探ります。これを知った立川バス株式会社が、厚意により奥多摩町琴浦で経営する食堂の一画を提供し、1963(昭和 38)年に多摩郷土館が開館しました。甲野と塩野は開館後も展示解説を行い、館の裏庭には敷石住居のモデルも造営されました。

その後、多摩郷土館は閉館。塩野コレクションは、武蔵野郷土館に保管されていた資料も塩野に引き取られ、現在は東京国立博物館が所蔵しています。



見学の葉 遺蹟 1963年頃



「郷土の歴史語る土器  
塩野半十郎さん発掘の百点」  
朝日新聞三多摩版  
1963年6月8日14面  
八王子市郷土資料館所蔵



# 八王子市郷土資料館

八王子市郷土資料館は、甲野が設立に携わった最後の博物館です。同館は、市民の要請により開館した博物館で、1962（昭和37）年の春、地元の収集家 井上郷太郎が10数年にわたって集めた考古資料（以下「井上コレクション」）1,800余点を、八王子市へ寄贈すると表明したことが発端でした。

1960（昭和35）年4月、甲野と井上は、都市化により失われてゆく多摩地域の遺跡を保存するために多摩考古学研究会を発足させました。1962年8月に、都立八王子工業高等学校教諭の梶國男をはじめとする地元の教職員を中心に「井上コレクションの市移管を推進する会（仮称）」（後に「郷土資料を保存する会」と改称）が結成されると、甲野も立会人を務め、市議会議員への陳情活動や、井上

コレクションの価値を市民に伝えるための展覧会や講演会で助力しました。受け入れ条件をめぐり市との交渉は難航しましたが、地道な活動は実を結び、八王子市は1963（昭和38）年12月の定例会議で、オリンピック記念事業として博物館を建設することを決議します。1964（昭和39）年3月には井上コレクションの寄贈式が行われ、1967（昭和42）年4月1日に八王子市郷土資料館が開館しました。

八王子市郷土資料館の展示室は、2021（令和3）年3月をもって閉室し、同年6月に桑都日本遺産センター 八王子博物館がオープンしました。



みんなの祖先の文化展 1962年11月24～26日  
八王子市郷土資料館所蔵

井上コレクションの価値を広く市民に知ってもらうために開催されました。開催当日は、観覧者が途絶えることなく、閉館時間を引き延ばして対応するほどの盛況でした。



「古代の八王子」の解説を執筆する甲野  
1967年3月31日  
八王子市郷土資料館所蔵

開館が迫る3月10日頃に、開館記念展「郷土のあゆみ展」の展示指導を依頼された甲野。わずか3週間という準備期間ですが快く引き受け、開館前夜まで解説の執筆にあたりました。



はちおうじ 3,4月号  
(八王子市広報 NO.195)  
1967年3月22日



八王子市郷土資料館外観と縄文土器の展示  
1967年  
ともに八王子市郷土資料館所蔵



開館式後の記念撮影 1967年4月1日  
八王子市郷土資料館所蔵

左から鈴木龍二、甲野、井上郷太郎、梶國男、橋本義夫、渡辺忠胤、清水成夫

## コラム 「東京モンキーセンター計画」

甲野は1959（昭和34）年から檜原村に通い、地元の習俗や野生動物の調査を行います。サルが出没することを知った甲野は、「サルたちに餌つけをして、安全な場所に定着させることができれば、どんなに楽しいだろう」と考え、当時の多摩動物公園所長にサル搜索の助力を懇願。「江戸っ子ザル」の生態観察ができる施設をつくらうとしていました。この「東京モンキーセンター計画」は、檜原村村長の理解も得て、1961（昭和36）年6月の村議会で了承もされたようですが、残念ながら実現することはありませんでした。



サルを搜索する甲野（中央）  
1960（昭和35）年頃  
『東京の秘境』136ページ所収



檜原村の野生動物出沒地図 1960年頃

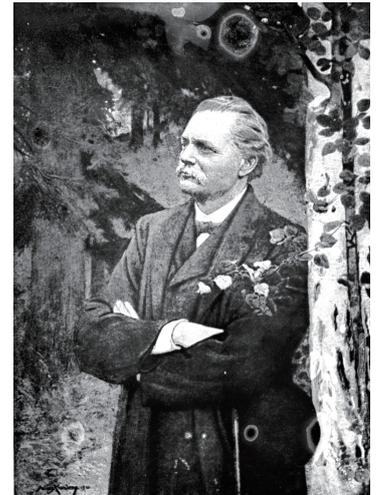
# 理想の博物館とその実践

## 甲野とスカンセン

甲野が博物館をつくる際に手本としたのが、現在もスウェーデンのストックホルムにあるスカンセンという野外博物館でした。スカンセンは、アルトゥール・ハゼリウスが1891(明治24)年に創設した世界初の野外博物館で、重工業化や過疎化で失われゆく農村地域の生活を保存するために設立されています。園内にはスウェーデン各地から移築された歴史的、文化的建造物が立ち並び、民族衣装をまとった係員が配されるなど、住民の生活風景がそのまま再現されました。甲野自身はスカンセンを訪れたことは無かったようですが、その展示方法は日本でも盛んに紹介されており、甲野とともに武蔵野博物館を創設した後藤守一も帝室博物館監査官時代の欧米出張でスカンセンを訪れています。



スカンセン園内マップ  
日本民族学協会 /  
日本人類学会 /  
日本常民文化研究所発行  
『民俗博物館はなぜ必要か』  
表紙図  
1954(昭和29)年9月



スカンセンの野外展示  
1 スウェーデンの民族衣装を着た人々 2 イェムランド地方の鐘楼  
ともに、1891～1900(明治24～33)年頃 Skansen 所蔵 Europeana より

アルトゥール・ハゼリウス  
Köpings museum 所蔵  
Europeana より



「子供たちと博物館」『武蔵野』第34巻第1号  
1955(昭和30)年1月

考古資料は作品のように並べるのみでなく、生活の中でどのように使用されたのかを示すのが効果的な展示であると考えていた甲野は、率先して欧米博物館の長所を取り入れました。それが、スカンセンに代表される野外展示であり、「武蔵野博物館拡張に関する草稿」(本紙4ページ掲載)にも記されたパークミュージアムの手法でした。

甲野が武蔵野郷土館の活動の中で記した「子供たちと博物館」には、博物館展示が子どもたちにとって退屈なものにならないよう、動的な展示とすることや、考古資料を実際の生活の道具として身近に感じてもらおうための学習会を開催するなど、博物館のあり方を模索する甲野の姿が垣間見えます。

## 日本民藝館

日本民藝館は、「民藝」という新しい美の概念の下、日常の生活に埋もれた美を歴史に刻むため、思想家の柳宗悦らによって企画され、1936(昭和11)年10月、目黒区駒場に開館しました。

1926(大正15)年に「日本民藝美術館設立趣意書」を起草し、美術館設立のための活動を開始した柳らは、1929(昭和4)年にスカンセンを訪れています。柳は、移築されたスウェーデン各地の建物や、その中に展示される何万という収集品を前に、「ハゼリウスの遺した仕事は見事である」と評しながら、「私達はハゼリウスがよく為し得なかつた仕事を立派に成し遂げよう」、「物を量に於て完全さより、質に於て洗練しよう」と、自らの成すべき仕事を再確認しています。



開館間近の日本民藝館本館  
1936(昭和11)年9月21日頃 日本民藝館所蔵

# 日本民族学会附属民族学博物館

武蔵野博物館が開館する9年前、1939（昭和14）年5月に、日本初の野外展示をもつ博物館が保谷村（現 西東京市）に開館します。それは、経済人であり民俗学者でもあった渋沢敬三が、学友とともに自宅の物置小屋の屋根裏部屋につくった博物館 アチック・ミュージアムを母体とする、日本民族学会附属民族学博物館でした。

1924（大正13）年、旅先でスウェーデンを訪れた渋沢は、スカンセンの展示に感銘を受け、1936（昭和11）年頃から人類学、民族学博物館設立の構想を練り始めます。1937（昭和12）年に、素封家であり渋沢が主催するアチック同人会の会員でもあった高橋文太郎の協力により、下保谷に土地を得ると、ここにアチック・ミュージアムの収蔵品の一部が移されました。野外展示には下保谷の民家が移築され、絵馬堂や車井戸を新築し、毎週日曜日には一般公開もされました。



民族学博物館の野外展示  
西東京市中央図書館 所蔵

1950（昭和25）年に、北海道から技術者を招いて建てられたアイヌの住居（右奥）と、1960（昭和35）年に移築された奄美の高倉（左）。奄美の高倉は、現在江戸東京たても園に再移築されています。



東京人類学会日本民族学会第一回連合大会 1936（昭和11）年4月1日 最後列の左端が甲野

1886（明治19）年に結成された東京人類学会と、1934（昭和9）年設立の日本民族学会が合同で開催した第一回連合大会には、解剖学者の小金井良精大会長をはじめ、当時第一線で活躍していた研究者が集いました。甲野も同会に出席しており、民族学会側からは渋沢敬三、高橋文太郎らが参加しました。また、1950年代頃に整理された民族学博物館の資料目録『民具標本収蔵原簿』に、甲野が戦前に採集した台湾の少数民族やアイヌの楽器や民具が記載されていることから、甲野は民族学博物館関係者と交流を持ち、博物館活動において同館の影響を受けていたのかもしれない。

## コラム 甲野と資料展示 - 武蔵野博物館以前 -

### 大山史前学研究所

大山史前学研究所は、陸軍大将 大山巖の次男 大山柏が開所した先史学の研究所です。甲野は所員として、関東近郊の貝塚を中心に調査研究を行いました。所内には、発掘調査で採取された考古資料が並ぶ展示室があり、蔵書1万冊に及ぶという図書室とともに、当時の研究者に利用されました。しかし、研究所は1945（昭和20）年5月の空襲により、貴重な資料とともに焼失してしまいました。



「研究室における大山柏」  
読売新聞朝刊  
1930（昭和5）年2月25日9面  
国立国会図書館所蔵

### 日本考古学研究所

1946（昭和21）年9月、オランダ人宣教師のジェラード・グロート神父は、千葉県市川市国府台に日本考古学研究所を設立しました。同所の設立には甲野も協力し、評議員および研究員を務めています。

研究所の2階には附属陳列館があり、第1・2土曜日の正午から午後4時までの時間帯に限り一般に公開されました。甲野が直接展示に関わることはなかったようですが、設立当初の同所には、後に博物館の運営をともに担う後藤守一や吉田格が揃い、民族学博物館を設立した渋沢敬三も名を連ねていました。



附属陳列館の内部  
1948（昭和23）年  
立正大学考古学会所蔵

## 2. 次世代へつなぐ 発掘調査と指導

戦争が終結すると、神話にはじまる天皇中心の歴史認識を脱却し、科学や考古学により裏付けられた歴史を学ぼうと、市民による郷土史研究が盛んになります。中学生や高校生のクラブ活動による発掘調査も各地で行われるようになりました。

甲野も博物館における教育活動と並び、多摩地域の学生に発掘調査の指導を行いました。ここでは甲野が国立で行った発掘調査と都立国立高等学校（以下、本文では「国立高校」）での指導を紹介します。



発掘現場で子どもたちに解説をする甲野（中央奥）

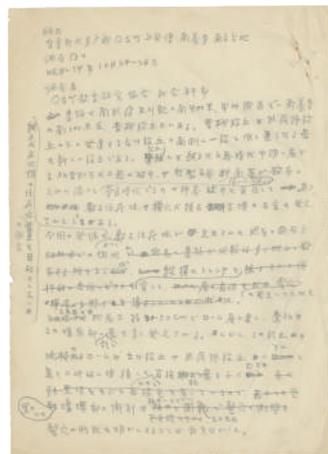
### 南養寺遺跡

南養寺は、1347(貞和3・正平2)年に開山した臨済宗の古刹で、国立市の南部に所在します。国立市域で発見される遺跡の多くは、多摩川の浸食によって形成された立川崖線および青柳崖線に沿うように位置しており、南養寺遺跡からは縄文時代中期および奈良・平安時代の集落跡や江戸時代の墓塚がみつかっています。

遺物が採集できることなどから早くから知られた遺跡でしたが、1959(昭和34)年10月24～26日に、甲野による指導の下、国立町教育研

究会社会科部を中心に発掘調査が行われました。参加した国立第一中学校の生徒が顔面把手付土器を発見したほか、加曾利E式土器や打製石斧などが出土しています。特に顔面把手付土器は、甲野の論考「顔面把手について」(『多摩考古』第2号)により、学界に知られるようになりました。

甲野はその後3度、桐朋高等学校や国立高校と同遺跡の調査を行っており、後の国立市遺跡調査会による調査も合わせ、国立市内では最も調査の進んだ遺跡です。長い間、遺跡名が定まらず、「南養寺南方台縄文遺跡」「矢川遺跡」「滝乃川学園東遺跡」などと表されていましたが、1982(昭和57)年の分布調査以降、名称が統一されました。



「南養寺南方台縄文遺跡調査報告」草稿

1959～1960(昭和34～35)年頃



顔面把手付土器  
1961(昭和36)年頃

顔面把手付土器  
(旧復元)

顔面把手付土器  
(現在の復元)

### 関 鑄物址

国立市南東部の甲州街道沿いに、鑄物業を営んだ関家の屋敷、関鑄物址があります。関家は、遅くとも1691(元禄4)年から1890(明治23)年頃まで鑄物の鑄造に携わり、仏像や梵鐘、鍋や釜などの日用品を製造しました。

1962(昭和37)年、鑄物の鑄造は多くが口頭伝承により伝えられるために文献が少なく、発掘により実態を明らかにするほかないと考えた甲野と、都立南多摩高等学校教諭の中村威を中心に、関鑄物址の発掘調査が行われました。調査は、5月3日、5日、13日の

3日間にわたり行われましたが、キューポラ(溶解炉)の破片や鑄型片が出土したのみで、工場の全容を明らかにすることはできませんでした。その理由については、1965(昭和40)年5月に甲野と中村が発表した報告書(『武蔵野』第44巻第2・3号)で、鑄型は使用後に砕いて再利用され、キューポラも傷むと破壊してしまい、製品が残ることも少ないためと説明されています。しかし当時このような調査例は少なく、国内における鑄物作業場の発掘調査の先駆とも言える仕事でした。



関鑄物址の調査 1962年5月  
左上：右から甲野、中村威  
左下：右から中村威、甲野



「つり鐘のイボ鑄型発掘」  
読売新聞(三多摩読売)  
1962年5月7日12面



埋蔵文化財の発掘について(通知)  
1962年4月30日

# 都立国立高等学校との発掘

国立高校の生徒による発掘は、歴史教育は考古学や郷土史に力を入れるべきと考えた松井新一教諭が、国立に転居した甲野を訪ねたことに始まります。以降、国立高校の発掘調査は昭和40年代まで

継続的に実施され、時にはかつて甲野が調査を行った遺跡の再調査も行われました。発掘調査の結果は、部誌『先史文化』を通して世に発表されるなど、精力的な活動が行われました。

## 茨城県利根町 立木貝塚

立木貝塚は、利根川の左岸に位置する縄文時代後期から晩期の貝塚です。1950（昭和25）年8月18日、19日の2日間にわたり発掘調査が行われ、黒色の遺物包含層から縄文時代の焼土跡が発見されました。異形台付土器や安行式などの土器片、土偶の足、耳飾、クジラの骨などが出土しています。



出土遺物の記録 [国立高校旧蔵資料]  
右下の写真は貫井遺跡

## 千葉県千葉市 犢橋貝塚

犢橋貝塚は、花見川上流域の台地に位置する馬蹄形の貝塚で、その貝層はキサゴ、ハマグリ、アサリ、カガミガイなどからなります。1951（昭和26）年8月26日に行われた国立高校による発掘調査でも、貝輪などの貝類のほか、土器片や石皿片が出土しています。



出土した安行式土器片と貝類 [国立高校旧蔵資料]

1925（大正14）年10月25日、東京帝国大学の副手であった甲野は、東京人類学会が主催する犢橋貝塚の遠足会に参加しました。遠足会は、主に明治から大正にかけて行われた遺物採集と行楽を兼ねた催しで、本格的な調査ではありませんでしたが、甲野は会の終了後も、遺物を求めて仲間とともに掘り続けたそうです。



遠足の記念写真と発掘の様子

## 東京都小金井市 貫井遺跡

貫井遺跡は、武蔵野台地の武蔵野段丘縁辺に位置する縄文時代中期の集落跡です。国立高校は、1952（昭和27）年8月の6日間、前田邸敷地内の遺跡を調査しており、土器、土偶、打製石斧、磨石、石皿などが出土しました。



調査風景と出土した勝坂式土器

## 東京都国分寺市 内藤新田横穴墓



横穴墓の墓前域石積と国立高校の生徒  
1958（昭和33）年6月

内藤新田横穴墓は、国立と国分寺の境、たまらん坂の南東に位置します。国立高校卒業生の親戚宅から石垣が露出したため、1958（昭和33）年6月8～22日に国立高校による単独調査が行われ、須恵器や土師器などが検出されました。全長約8mという、多摩地域の横穴墓としては規模の大きいもので、年代は8世紀前半と推測されています。



出土した須恵器、土師器、木棺の鉄釘

1946（昭和21）年1月、ジェラード・グロート神父が主宰するオリエンタル・インスティテュートが、貫井遺跡の小発掘を行っています。

これには甲野や塩野半十郎、後藤守一らも同行し、調査の援助を行いました。

左から塩野半十郎、甲野、棟方末華、ジェラード・グロート

# 甲野の文化財保護活動

甲野の文化財保護活動は、国分寺の史跡地に住宅が乱立する様を黙認することができずに立ち上がったのが発端であったようです。甲野は学生への指導の中で、文化財は共同の財産であるから、保存活動にも専門家のみが携われればよいのではなく、国民全体が力を合わせて保存に努めなければならないと述べています。

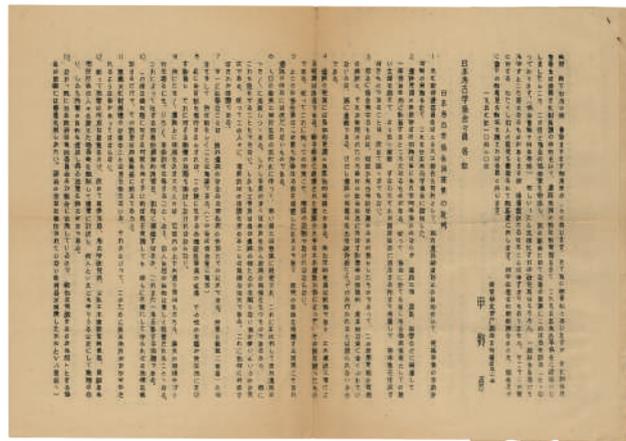


住宅地が迫る府中市片町の古代竪穴集落跡  
1954（昭和29）年

遺跡の破壊が全国的な問題として認知されるようになると、中学生による未熟な発掘調査も非難されました。これに対し甲野は、1957（昭和32）年7月25日付の朝日新聞紙上で、確かに未熟であるが、学ぶ意欲は認められるべきであり、文化財は教育と結びつかなければその価値を発揮できないと応えています。また、文化財保護のために必要なのは、法による規制ではなく、日本人の一人一人にその意義を理解してもらうことだと主張しています。



「論壇 埋蔵文化財の保護  
取締り強化よりもまず啓発運動」  
朝日新聞朝刊 1957年7月



日本考古学研究会会員宛てた書簡  
1957年10月20日

1956（昭和31）年の第9回ユネスコ総会において、発掘調査を事前許可制とする方針が定められると、文化財保護委員会は日本考古学協会に許可制導入の是非について諮問しました。甲野は、許可制についての自らの考えを新聞に掲載した文章を添えた書面をもって、協会会員に訴えています。

1950年代後半から始まる高度経済成長によって高速道路や集合住宅建設などの大規模開発が行われるようになると、一つの開発事業が大量の遺跡を破壊するという事態が起こります。多摩地域にも大規模開発の波が押し寄せ、甲野も破壊の危機にある遺跡の保存活動に努めました。

大学のグラウンド造営のために曲輪が破壊された八王子城跡の調査や保存運動を先導し、中央自動車道の建設用地となった宇津木遺跡の発掘調査では副団長を務めています。住宅団地の建設に伴い行われた中田遺跡の発掘調査では、がんの闘病生活を送りながら、調査団長として指揮を執りました。

## 宇津木遺跡



竪穴住居跡 1964（昭和39）年



宇津木遺跡にて 1964年  
左から塩野半十郎、甲野

## 八王子城



八王子城を調べる会の人々  
1965（昭和40）年6月5日  
前列右から4人目が甲野



破壊された山下曲輪の調査  
1966（昭和41）年1月23日  
右端が甲野

## 中田遺跡



発掘風景 1966（昭和41）年



中田遺跡見学会  
1967（昭和42）年3月19日  
手前に甲野



八王子市内の遺跡の保存について講演を行う甲野  
1966（昭和41）年2月12日  
八王子市郷土資料館所蔵

## コラム 日本最初期の電気探査

電気探査とは、地中に流した電流の抵抗により、発掘せずに遺跡を調査する方法です。1948（昭和23）年4月、資源科学研究所の協力の下、甲野は、現在の府中市武蔵台 都立多摩総合医療センター敷地内に位置する「せんげん山」と呼ばれた塚で、電気探査を試みました。微弱ながらも抵抗が感知され、その後の発掘調査では棺の痕跡らしきものが発見されたといえます。甲野らの試みが直ぐに根付くことはありませんでしたが、今日行われている科学的探査の先駆けとなるものでした。



せんげん山での電気探査  
1948（昭和23）年  
甲野家所蔵  
右端が甲野

## 3. くにたちと甲野

甲野は肩書きや権威を嫌い、明利を求めずに、ただひたすらに自身の研究に愛情を注いでいたといえます。しかし、学術研究や遺跡の保存運動だけでなく、国立における市民運動や社会教育活動の場にも、甲野の姿がありました。



国立の自宅の前にて 甲野家所蔵

## 国立音楽大学

甲野が国立音楽大学の講師となったのは1954（昭和29）年からで、翌年からは教授として教鞭をとり、人類学、考古学、民俗学、社会学といった授業を受け持ちました。甲野は、1948（昭和23）年頃から慶應義塾大学の講師を務めていましたが、教員室に顔を出さなかったために忘れられ、人類学の教室に別の人物が選任されると「慶応は国立から遠くて通うのが大変だが、国立音楽大学から人類学の先生を頼まれていたのでちょうどよかった。こんどはすぐ隣だから」と答えたそうです。

甲野は、教え子を自宅に招いたり、喫茶店に連れてゆくなど、学生との交流も大切にしました。1962（昭和37）年には、6人の音大

生と下谷保地域や石神地域に伝わる歌を記録し保存するために、民謡採集グループを結成しました。国立市の前身である谷保村は甲州街道に面して家々が立ち並び、仕事の場や祝いの場などで様々な歌が歌い継がれてきましたが、昭和20～30年代になると、農業が徐々に機械化され、冠婚葬祭も式場で行われるようになり、それまでの歌も徐々に歌われなくなりました。甲野と学生は、放課後や休日を利用し、テープレコーダーを担いで旧家を訪問しては、収録した歌を楽譜に起こす作業を続け、「棒打ち歌」「糸とり歌」といった労作歌、「小桜」などの祝い歌、「まりつき歌」などのわらべ歌、およそ50曲を採譜しました。



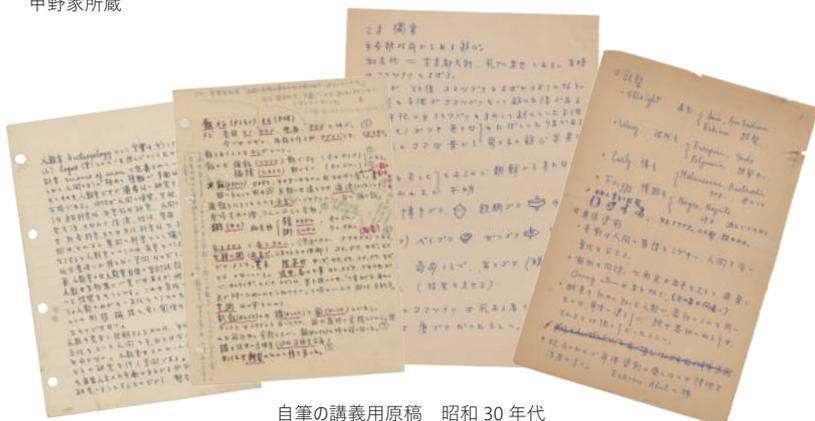
国立音楽大学の学生と甲野 昭和30年代  
甲野家所蔵



音大生と秋川でバーベキューをする甲野（右端）  
昭和30年代



「都下の“民謡保存”へ 国立音楽大の6学生」サンケイ新聞多摩版  
1962年11月28日16面



自筆の講義用原稿 昭和30年代



楽譜「小桜」1962年頃

# 教育と文化のまち

甲野が居を構えた国立駅周辺の地域は、大正末期に箱根土地株式会社により「国立大学町」として開発されました。また、学園都市に相応しい環境を望む住民による運動が発端となり、1952（昭和27）年には、文教地区指定を受けています。その歴史的経緯から、国立は教育や文化のまちとしての一面を持っています。

甲野はいわゆる名家の出身で、西欧風の素養を身につけた寸分の隙も無い紳士であったといえます。甲野は国立の文化人や学者、政治家たちとも交流を持ち、1951（昭和26）年に始まる文教地区指定運動においても、その人脈を活かして有力新聞社を訪ね歩き、国立駅前で行われた署名活動などにも参加したようです。

文教地区指定運動の後、国立には様々な住民団体が生まれました。青年団体「土曜会」もその一つで、同会が設置した図書室が前身となり、1955（昭和30）年に国立町公民館が開館すると、甲野は公民館運営審議会の委員長を2期務めました。また、武蔵野の草花を愛していた甲野は、文教地区の美化運動にも協力し、大学通りに植え込む花を育てるために自宅の庭を提供しています。



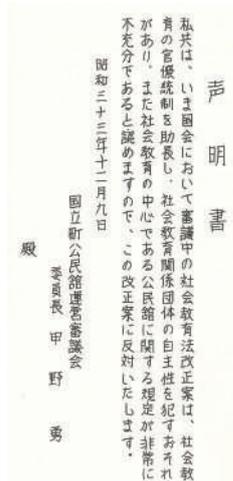
仁王像制作中の関頑亭（右）と甲野（左）  
1955（昭和30）年頃  
甲野家所蔵



「身についた文化性 小さな喫茶店が進歩の泉」  
読売新聞（三多摩読売）1953（昭和28）年2月24日8面  
国立国会図書館所蔵  
左から2人目が甲野、  
その右に中館耕造  
（国立音楽大学理事）



国立の喫茶店での談笑 1954（昭和29）年  
中央で帽子を被っているのが甲野



国立市公民館運営審議会の  
の声明書  
1958（昭和33）年12月9日  
国立市公民館所蔵



「草花で街を彩る 文教地区の美化運動」  
朝日新聞都下版  
1952（昭和27）年2月1日4面  
東京都立中央図書館所蔵

## コラム 人類学者 甲野勇



東南アジア民族の調査資料  
1943（昭和18）年頃



民俗調査のため小金井市の民家を訪れた甲野  
1955（昭和30）年頃  
右に、機織り用のたて糸をそろえるために用いる経台（へだい）がみえる。



民族学関係の書籍

同窓の八幡一郎によれば、学生時代の甲野は、時折「自分は日本のハッドン<sup>※1</sup>、日本のバルフォア<sup>※2</sup>となるのだ」と語り、買い集めていた洋書も、民族誌関係のものが多かったようです。「未開人の身体装飾」(1929・昭和4年)や「疱瘡と疱瘡神」(1966・昭和41年)のような民族学や民俗学の分野に属する論文を発表し、国立音楽大学では人類学や民俗学の講義を受け持つなど、甲野の仕事は多分野にわたり、考古学の研究分野に収まるものではありませんでした。

- ※1 アルフレッド・コート・ハッドン (1855-1940)  
海洋生物学を学び、ケンブリッジ大学動物学博物館の学芸員に就任。ダブリンの王立科学学校の動物学教授となった後、ケンブリッジ大学で人類学を講じる。
- ※2 ハンリー・バルフォア (1863-1939)  
オックスフォード大学ピット・リヴァーズ博物館の学芸員を務め、後に同大学の民族学教授を務める。

## おわりに

大山史前学研究所の所員であった池上啓介は、甲野の人柄について、後輩の指導には特に熱心で、時には惜しげもなく自身の資料を提供したと語っています。家柄や学歴を感じさせず、誰にでも分け隔てなく接した甲野は多くの功績を残しました。

本展では甲野の仕事のほんの一部を紹介しました。くにたち郷土文化館では、今後も甲野勇氏資料の整理とデジタル化を進め、資料の活用と公開に一層努めていきたいと考えています。

# 関連年表 くにたちに来てから

1946 (昭和21)年	7	雑誌『あんとろぼす』創刊	
	9	日本考古学研究所設立	
		10月14日～11月6日 秋田県大湯環状列石の調査	
		秋頃、甲野家 国立に転居	
1948 (昭和23)年	●	慶應義塾大学の講師となる	
	4	府中町 せんげん山の電気探査	
	7	6日 武蔵野文化協会 発足	
	8	武蔵国分寺周辺の竪穴住居跡調査	大湯環状列石へ向かう 1946 (昭和21)年 前列左から後藤守一、吉田格、甲野
	10	20日 武蔵野博物館 開館	
1949 (昭和24)年	8	国分寺町 多喜窪遺跡の発掘調査	
1950 (昭和25)年	5	文化財保護法制定	
	8	18, 19日 茨城県 立木貝塚の発掘調査	
1951 (昭和26)年	8	26日 千葉県 橋貝塚の発掘調査	
1952 (昭和27)年	1	国立町の一部が文教地区指定を受ける	
	8	小金井市 貫井遺跡 (前田邸) の発掘調査	
	12	国分寺町立文化財保存館 開館	
1954 (昭和29)年	1	14日 武蔵野郷土館 一般公開	
	4	『縄文土器のはなし』刊行	
	●	国立音楽大学の講師 (翌年に教授) となる	
	7	府中市片町 古代集落跡の発掘調査	多喜窪遺跡で土器片を手にする甲野 1949 (昭和24)年
1955 (昭和30)年	11	3日 国立町公民館 開館 公民館運営審議委員会の委員長を務める (1959年11月まで)	
1956 (昭和31)年	5	第9回ユネスコ総会	
	6	30日 武蔵野郷土館を辞任	
1958 (昭和33)年	6	8～22日 国分寺町 内藤新田横穴墓の発掘調査	
1959 (昭和34)年	●	3～5月 私達の歴史館 開館	
	●	春頃、檜原村周辺の調査を開始	
	10	24～26日 南養寺遺跡の発掘調査 (顔面把手付土器が出土)	
1960 (昭和35)年	4	2日 多摩考古学研究会 発足	
	10	『武蔵野を掘る』刊行	
1962 (昭和37)年	5	3, 5, 13日 関鑄物址の発掘調査	
1963 (昭和38)年	●	6月頃 多摩郷土館 開館	八王子城跡にて 1965 (昭和40)年頃
1964 (昭和39)年	●	3～8月 八王子市 宇津木遺跡の発掘調査	
	10	東京オリンピック開幕	
1965 (昭和40)年	5	24日 八王子城を調べる会 発足	
1966 (昭和41)年	9	1日 がん治療のため立川病院に入院	
	11	八王子市 中田遺跡の発掘調査 (1967年3月まで)	
1967 (昭和42)年	4	1日 八王子市郷土資料館 開館	
	10	15日 逝去 (享年66)	最晩年の甲野 1967 (昭和42)年



イラスト 甲野勇

## 謝辞

本書の制作および夏季ミニ展示「甲野勇 くにたちに来た考古学者」の開催にあたり、下記の機関並びに各位よりご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。  
(50音順、敬称略)

阿部由紀洋、池上悟、石井秀和、岡田淳子、亀田直美、河津美穂子、甲野美知子、紺野英二、佐々木克典、清水周、古屋真弓、松下まゆみ、領塚正浩

井の頭自然文化園、江戸東京たてもの園、神奈川大学日本常民文化研究所、国立市公民館、国立国会図書館、東京都立中央図書館、西東京市芝久保図書館、西東京市中央図書館、日本民藝館、八王子市郷土資料館、武蔵国分寺跡資料館、立正大学

## 主な参考文献

- ・阿部芳郎『失われた史前学』岩波書店、2004
- ・岡茂雄『木屋風情』平凡社、1974
- ・落合知子『改訂増補 野外博物館の研究』雄山閣、2014
- ・加藤 功・土井悦枝・坂詰秀一・岡田淳子・川崎義雄【『小特集』武蔵野郷土館の活動と考古学』『東京都江戸東京博物館紀要第5号』東京都江戸東京博物館、2015
- ・北村信正 他『小金井公園』(財)東京都公園協会、1995
- ・くにたち郷土文化館『甲野勇の軌跡』くにたち郷土文化館、1998
- ・国立市遺跡調査会『国立市文化財調査報告第15集 南養寺遺跡 I』国立市教育委員会、1984
- ・桐国男『緑がなくなるとき - ひとつの文化財保護運動の記録 -』東京都立八王子図書館、1970
- ・桐国男『土の巨人 - 考古学を拓いた人たち -』(財)たましん地域文化財団、1996
- ・甲野勇『縄文土器のはなし』学生社、1976
- ・甲野勇『武蔵野を掘る』雄山閣出版、1960
- ・甲野勇『東京の秘境』校倉書房、1963
- ・甲野勇先生の歩み刊行会『甲野勇先生の歩み』甲野勇先生の歩み刊行会、1968
- ・坂詰秀一「『武蔵野』と考古学」『下布田遺跡 武蔵野の歴史と考古学』江戸東京たてもの園、2015
- ・佐々木克典「都立国立高等学校歴史考古学部より寄贈された資料について」『くにたち郷土文化館研究紀要第6号』くにたち郷土文化館、2015
- ・塩野半十郎『多摩を掘る』武蔵書房、1970
- ・清水周「甲野勇の博物館活動 - 武蔵野博物館を中心に -」『くにたち郷土文化館研究紀要第2号』くにたち郷土文化館、2000
- ・西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会『高橋文太郎の真実と民族学博物館』西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会、2008
- ・領塚正浩「ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所～失われた考古学史を求めて～」『鎌ヶ谷市史研究第9号』鎌ヶ谷市教育委員会、1996
- ・和田哲・江坂輝弥・桐国男・吉田格・渡辺忠胤【『座談会記録』企画展「甲野勇の軌跡」公開座談会記録』『くにたち郷土文化館研究紀要第5号』くにたち郷土文化館、2003

### 表紙写真

- 1 国立の自宅の庭でくつろぐ甲野 昭和30年代
- 2 武蔵野博物館 展示室 1950 (昭和25)年頃
- 3 武蔵野郷土館の弥生式高床倉庫 1954 (昭和29)年頃
- 4 国分寺町立文化財保存館 1952 (昭和27)年頃
- 5 顔面把手付土器 1961 (昭和36)年頃
- 6 八王子市郷土資料館の展示品と甲野 1967 (昭和42)年 甲野家所蔵

### 甲野 勇 くにたちに来た考古学者

編集・発行 くにたち郷土文化館  
(公益財団法人 くにたち文化・スポーツ振興財団)  
〒186-0011 東京都国立市谷保 6231  
電話 042-576-0211  
発行日 2021 (令和3)年7月22日



イラスト 松下紀久雄

## くにたち郷土文化館

### [凡例]

- ・本書は、くにたち郷土文化館の2021年度夏季ミニ展示「甲野勇 くにたちに来た考古学者」(2021年7月22日～9月12日)の図録です。
- ・本書には2021年度夏季ミニ展示「甲野勇 くにたちに来た考古学者」で展示した資料の一部を掲載しました。
- ・[国立高校旧蔵資料]とあるものは、都立国立高等学校から国立市へ寄贈された資料であり、国立市が所有する資料です。所蔵者等を特に明記していないものは、国立市が所有し、くにたち郷土文化館が所蔵する「甲野勇氏資料」です。
- ・引用部分の旧字体は新字体に改めました。
- ・個人名の敬称および敬語は省略しました。
- ・本書の執筆は中根聖可が、レイアウトの補助は安齋順子が行いました。